

筑紫野市指定史跡

すぎ つか はい じ
 杉 塚 廃 寺



奈良時代に天下の一都会なりといわれた大宰府は、平城京や平安京に次ぐ大都会でした。ここには南都の諸寺にも劣らぬ観世音寺をはじめ多くの寺院が建立され、当時の大宰府文化の隆盛に大きな役割を果たしました。しかし現在では、これらの寺院のほとんどは廃寺となり、わずかに残された礎石が、その所在を教えてくれるのみです。これから述べる杉塚廃寺もそのうちのひとつです。大宰府の研究に情熱をかたむけた鏡山猛氏は、大宰府には南北二十二条(2.4 km)、東西二十四坊(2.6 km)の条坊制(条坊制については本シリーズ「朱雀大路」を参照)と呼ばれる町割りを復元されています。これによると杉塚廃寺は条坊の右郭十九条十、十一坊に

あたります。現在では筑紫野市杉塚二丁目158-1の一带です。ここはいつのころからか竹やぶになっていました。しかし、そのなかに建物の基壇らしき高まりがあり、その上に三個の礎石があります。地元では、ここを无動寺あるいは天動寺の跡と言いつづえられています。

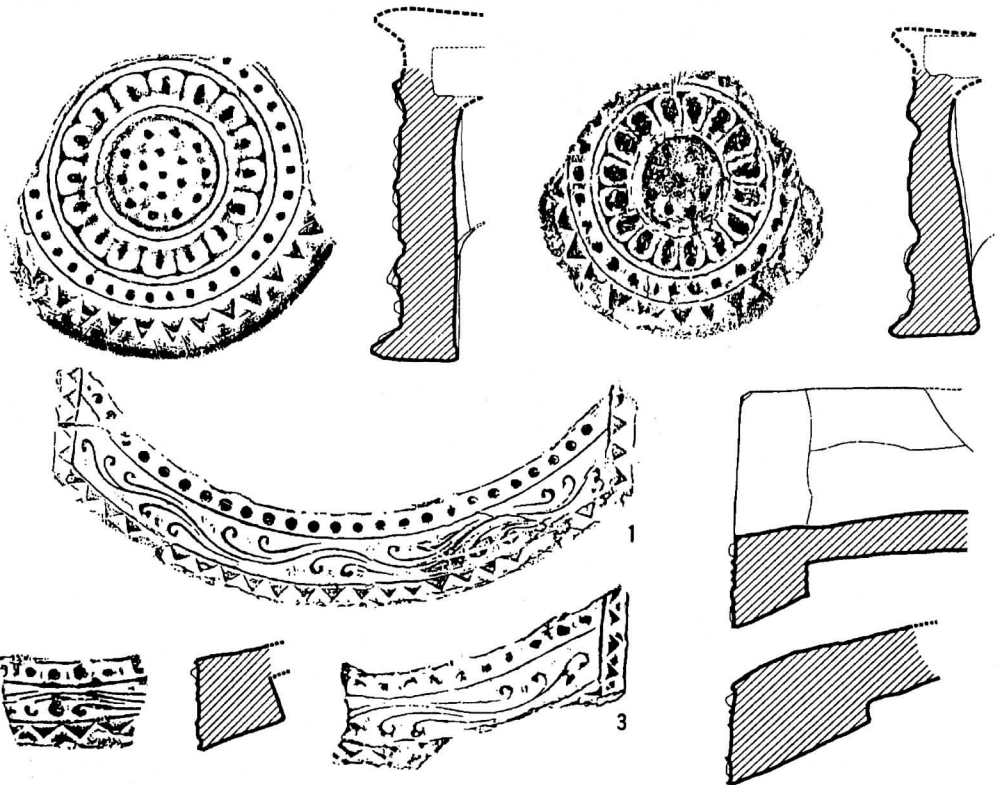
杉塚廃寺については二度の発掘調査が行われています。一回目は昭和48年の市道の側溝工事に伴う調査で、礎石が現存している地点から南西60mのところで行われました。この調査では基壇の東南隅とみられる掘り込み地業(建物の基壇を強固にする工事)が確認されるとともに円形の柱座をもつ礎石一個が見つかっています。二回目の調査は

礎石が現存する基壇状の高まり部分について調査を行っています。この調査で新たに五個の礎石が発見され、この建物の柱間寸法は南北十八尺(5.4m)、東西十二尺(3.6m)あることが分かりました。しかしながら建物全体の規模を推定できるような手掛かりは得られなかったため、正確な規模については未だわかりませんが、おそらく間口五間、奥行四間程度の建物と考えられます。この二回の調査によって二棟の建物があったことが確認されましたが、その性格がわからないため、この寺院の伽藍配置がどうなるかについては言及できる段階ではありません。もし仮に、塔が西に金堂が東に並立する法隆寺式の伽藍配置を当てはめた場合、発見されたふたつの建物は中門と金堂に当てはめることも可能です。このことについては今後の調査の進展如何によっては明らかになるものと思われます。

それでは、この杉塚廃寺はいつ建立されたのでしょうか。もちろん正確な年代は知る故もありませんが、おおよその年代を推定することは可能です。これまでに発掘調査による出土品を含めてかなりの瓦が採集されており、その一部は近くの民家に保管されています。これらの資料によるかぎり、おおよそ七世紀の末から八世紀の初頭頃に建立されたものとみて大きな誤りはないでしょう。

この杉塚廃寺がある天拝山山麓は古代遺跡が豊富などころで、弥生時代の住居跡をはじめ原口古墳、剣塚古墳、埴安神社古墳など著名な古墳が分布しており、この地方に早くから有力な豪族が存在したことが考えられます。この寺院もこうした歴史的な背景をもとに建立されたものではないでしょうか。

(石松好雄)



▲上段 軒丸瓦 中・下段 軒平瓦